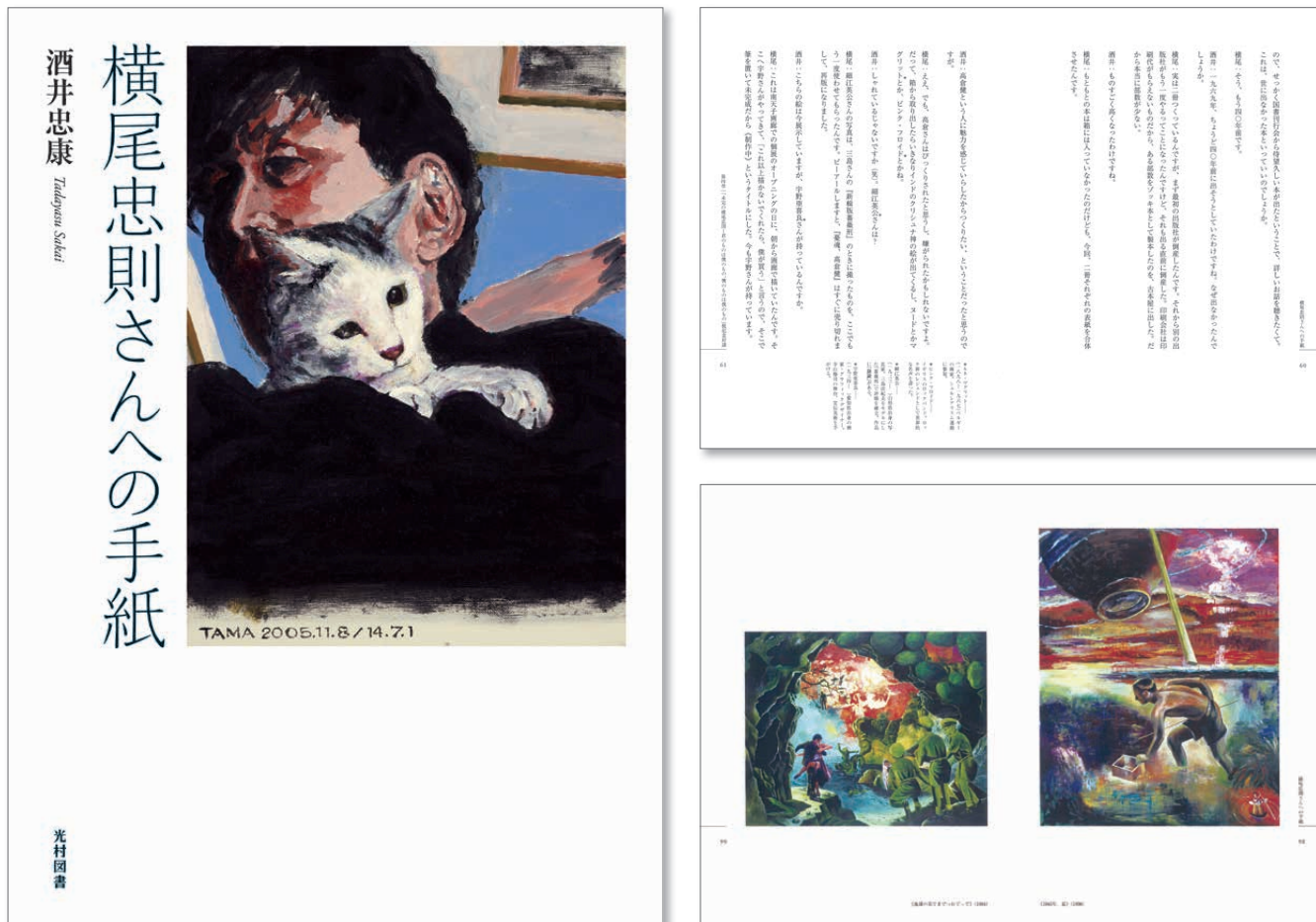


新刊のご案内



『横尾忠則さんへの手紙』

酒井忠康著 光村図書出版 2019年10月18日発行
本体2,000円＋税

世 田谷美術館館長・美術評論家の酒井忠康氏が、展覧会図録や新聞記事、書籍等に発表した数々の文章・対談から厳選し、1冊の本にまとめました。裏話的な話題だけでなく、美術評論家という立場で、難解ともいわれる横尾忠則氏の作品を紹介し、愛情をもって論じています。

旧知の間柄である画家へ、酒井忠康氏からのエールともいうべき読み応えのある1冊。横尾忠則氏の作品はもちろん、氏のアトリエなどもカラーで多数紹介しています。



旧知の間柄である酒井忠康氏(右)と横尾忠則氏(左)。(写真・加藤絢)



← 詳細はこちらから。



光村図書

美術準備室 No.16

2019(令和元)年10月25日

発行人 ■ 小泉 茂
発行所 ■ 光村図書出版株式会社
〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9
電話: 03-3493-2111
www.mitsumura-tosho.co.jp
E-mail: koho@mitsumura-tosho.co.jp
デザイン ■ Better Days
(大久保裕文+深山貴世)
印刷所 ■ 株式会社 加藤文明社

上／酒井忠康氏と横尾忠則氏の対談
下／横尾忠則氏の作品「地球の果てまでつれてって」「1945年、夏」



アトリエ 訪問

第 16 回

富田菜摘

美術家

耳がスプーンのサル、胴体が空き缶のコウモリ、
鼻がトランペットのゾウ——。さまざまな廃材を組み合わせ、
動物をはじめとするユニークな立体作品を生み出す富田菜摘。
ときに2メートルを超える作品も手掛ける彼女のアトリエは、
意外にも、一般的な戸建て住宅の一室だった。

撮影 永野雅子





家のいたるところに飾られた大小さまざまな作品。その一つ一つに名前が付けられている。

外観は、ごく普通の住宅。扉を開けると、玄関横に置かれたカメレオンのオブジェが目飛び込んだ。よく見ると、胴体は扇風機のカバーでできている。「作品の保管場所がないので家中に飾っているんです」。部屋に足を踏み入ると、ティラノサウルスやフクロウなど、さまざまな生き物たちが招き入れてくれた。

——ご自宅の一室で制作されているんですね。

富田 アトリエと住居が一緒のほうが創作がはかどるんです。アトリエだけならもっと広い物件もあると思うんですが、身近な生活廃材を使っているの、生活の一環としてつくっているほうがバランスが良くて。

私の場合、生活と創作の境界線は、あいまいなほうがいい。制作中に材料が足りなかったら、家の中を歩き回って、使えそうな材料を探します。台所からスプーンを持ってきて、まだ使えるのに材料にしてしまったこともあります（笑）。

この家には、最近引っ越してきま



棚にはさまざまな廃材が並ぶ。廃材は、個展の会場で来場者に譲ってもらうことも多いという。

した。近くにお気に入りの園芸用品店があって、息抜きに植物を見に行くと元気が出ます。

——いつから廃材を使って制作されているのでしょうか。

富田 美大受験の予備校に通っていた高校3年生の頃です。自由課題で、金属廃材を使ってガラパゴス諸島に生息するウミイグアナをつくりました。大自然の動物を、それとは対極にある都市の廃材を使って表現することで、自分なりに環境へのメッセージを込めたいと思って。進学した美大では油彩画専攻だったのですが、結局一度も油彩画を描かず、立体ばかりつくっていました。

思えば、素材へのこだわりは、小学生の頃からあったのかも。夏休みの課題で、カボチャの繊維から紙をすいて、その紙でかぼちゃ型のランプをつくったことがあったんです。何かをつくるとき、何の材料を使うのが一番いいんだろう、という視点はその時からもっていたんですね。

今、雑誌や新聞を使った人物の立体もつくっているのですが、サラリーマンには新聞紙、少年には少年漫画雑誌、女子大生にはファッション誌と、つくる人物によってメディアを使い分けています。

——作品に使う廃材は、どのように選ぶのですか。

富田 基本的に設計図は書かないので、作りながら考えます。私はどの作品も、顔から作り始めるんです。顔ができると性格や性別などが感じられるようになるので、それに合わせて体の動きや形、色などを考えながらつくっていく。ストックしている廃材がたくさんあるので、最適なものを選び、つなぎ合わせていきます。逆に、廃材の形から何を

くるか発想することもあります。

制作では、ペンチや電動ドリル、金切バサミなどを使います。ときには、固い金属を何度も折り曲げて金属疲労で切断することも。溶接はせず、小さな穴を開け、針金で一つ一つつなぎ合わせていきます。

——富田さんにとって、廃材の魅力とは何でしょうか。

富田 廃材には、その物が今までにたどってきた歴史があります。例えば金属だと、表面の「錆」がすごくきれいだと思っていて。その廃材がどこで、どんなふうに使われていたかという物語が、錆や色あせ、傷となって刻まれているんです。そういった新品にはない味わいがロマンチックだなと。自分で金属を焼いて風合いを出すこともありますが、天然の錆には勝てません。

身の回りの生活道具は、日々変化しています。扇風機なんか、羽のないタイプのものが出てきていますよね。今はあたりまえのように思える身近な生活道具も、数年後は全く違う形をしているかもしれない。だからこそ、時代とともに変化していく物の形を、作品に組み込んで残していけたらいいなと思っています。



とみた・なつみ

1986年東京都生まれ。2009年、多摩美術大学絵画学科油画専攻卒業。金属廃材を使った動物や、新聞紙や雑誌を素材にした人物など、身近な素材を用いてユニークな作品を制作している。最近の個展に、絶滅した恐竜や動物たちを廃材で表現した「富田菜摘展 LOST WONDERLAND」（Bunkamura Gallery, 2019年）など。



自然物の 存在感を 表現する

【特集】

身近にある石も、さまざまな感覚を通して感じ取ってみると、その存在感を再発見できる。石の来歴や表情・性格に思いをはせながら、粘土や絵の具を使って石の形・色を表現する、宜昌大先生の授業を取材した。

撮影 伊東俊介

授業レポート

ようこそ、「石先輩」

大阪府摂津市立第三中学校

宜昌大^{そん ちゃん}先生 × 1年生 (2組・3組 各32名)

宣先生の授業は、生徒を引き付ける仕掛けにあふれている。今回の授業も、そう。本題材は、身近な石をさまざまな感覚を通して捉え、その特徴を自分なりに表現するという内容だが、先生は石に愛着を持ってもらうために、「石先輩」と呼ぶのだ。さて、生徒はどのように石に思いをはせ、形や色を表現するのだろうか。



先生が自ら拾ってきたという約200個の石の中から、形や色が気に入ったものを選ぶ。

第1時

「石先輩」に触れる

カチ、カチ――。

始業のチャイムが鳴り終わるのを待って、先生は手に持った石をぶつけて音を鳴らした。「今回のテーマはこれ。何の変哲もない石です」と切り出し、生徒たちに「触ってみて」と差し出した。生徒からは、「丸みがある」「つるつる」「冷たい」とさまざまな感想が出る。

「この石は、福井県の海岸で拾ったものです。では、質問。この石は最初からこの状態で海岸にあったと思う？」。先生が問いかけると、生徒たちは首を横に振り、「山から流れてきた」と一人がつぶやいた。

「そうだね。もともと山にあった大きな岩が、川に流されて小粒な石となり、海にたどり着いた。もっと言うと、山にあった大きな岩も、も



匂いを嗅いだり、指先で触れてみたりして、「石先輩」を感じ取ろうとする生徒たち。



「自分だけの石先輩を見つけて、理解を深めましょう」と話す宣先生。

もとはマグマが固まってできた溶岩石だったりするかもしれない。そう考えると、この石は、私たちの何百倍も何千倍も長生きして、この形になった大先輩といえます」。

ここで、スクリーンに「ようこそ石先輩」という授業テーマが映し出された。「先輩のそういった来歴を知ると、軽々しく投げたりなんかできないよね」と笑いを誘いつつ、今回の授業では、粘土や絵の具を使い、石の形や色を表現することを告げた。「制作を通して、身近な自然物がもつ存在感を再発見してもらえたらと思います」。

続いて先生は、自身で拾ってきたという約200個の石を披露。「今日は自分だけの石先輩を見つけて、理解を深めましょう。この中から一つずつ石を選んでください」。生徒は石の入ったケースに集まり、手に取りながら、お気に入りの石を選んだ。

そして、選んだ石の特徴を捉えるために、形や色のほか、想像できる性格などをワークシートに書き込んでいく。「目で見ただけでなく、指先で触ったり、耳に近づけて音を聞いてみたり、匂いを嗅いでみたりしましょう」。先生はそう呼びかけ、生徒たちは石先輩をさまざまな感覚で感じ取ってみる。

ひと通り記入を終えたら、石の特徴をグループで発表。「形は丸みがあって、表面はつるつる。色は白っぽくて、茶色と黒も交じっています。

性格は優しい」「四角い形だけど、ところどころで丸みもあります。優しさも兼ね備えているイケメンって感じ」などと盛り上がる。

先生は机間指導しながら、生徒たちに質問を投げかけた。

先生「優しいっていうのは、どこを見てそう思ったの？」

生徒「うーん、丸いところ」

先生「じゃあ、イケメンってところは？」

生徒「とがっているところ、かな」

先生「なるほど。丸い部分には優しさを感じて、とがっている部分には格好よさを感じるわけだね」

名前をつけている生徒もあり、とても楽しそう。発表後は、グループ内でそれぞれの石について意見交換し、さらにワークシートに特徴を書き加えていった。

第2・3時

「指で見て」形をつくる

「前回の授業で石先輩と運命の出会いをしたよね。今日は石先輩の形をつくっていきます」と先生。

作品制作ではまず、成形からスタートする。濡らした新聞紙を絞って芯材とし、その上から粘土を貼り付けていくという流れだ。

この工程で先生が重視したのは、

「指で見る」こと。「石先輩を触ってから、自分の作品を触ってみてください。質感の違いがわかるはず。指というのはすごく敏感で、例えば、1本の髪の毛を上からなぞると、下からなぞるとで、微妙な触り心地の違いを感じ取ることができる。目で見てわからない細かな違いも、指で触ることでわかります」と話し、触って確かめることの大切さを呼び掛けた。



「石先輩」と作品を並べて、じっくり観察したり、指先で触れたりしながら違いを感じ取る。



へら、ブラシ、ローラー、スポンジなど、成形や着色に使えるような道具を自由に選んで使う。

生徒たちは、水を張った筆洗に新聞紙を浸し、ギュッと固く絞ってから、その上に粘土を境目のないよう貼り付けていく。石と作品を横に並べて、さまざまな角度から凝視して形を比べたり、指先で触れたりして、形を整える。第1時では和気あいあいと「先輩」の紹介をしていた生徒たちも、制作に入ると、表情は真剣そのものだ。

美術室には、粘土を加工するためのさまざまな道具が用意されており、「使えるものは無限大」と先生。生徒たちは表面の凹凸やごつごつした質感を表現するために、綿棒やようじ、へら、ブラシなどのさまざまな道具を使っていた。形を大きくしすぎてしまった生徒には、「少しダイエットしよう」と先生がアドバイス。粘土をへらで切り取り、一回り小さく形を整えていた。

第4～7時

重ね塗りを繰り返す

いよいよ着色に入る。

冒頭で、先生が「お役立ちアイテム」として紹介したのは、「ようこそ、石先輩」の前に取り組んだ「色の魔法陣」という題材。この題材は、生徒にさまざまな混色を試させ、一人一人が星型の色相環をつくるというものだが、その取り組みが、今回の題材の布石にもなっている。

また、生徒が使う絵の具セットに

も、独自の工夫がある。先生が必要と感じる12色がセットされており、あえて茶色の絵の具は抜いてあるのだ。茶色があると、土でも木の幹でも、それで済ませてしまう生徒が多いからだという。

『色の魔法陣』を参考にしながら、水で薄めた絵の具を塗り重ね、塗ったら乾かすを繰り返します。色の力で、石先輩の『石人生』の重みを表現してみましょう。白っぽいところは濡らした筆でこすると、絵の具がはげて白っぽくなります。白を塗る前に試してみてください」。

先生がそう告げると、生徒たちはさまざまな色の絵の具をパレットに出し、「色の魔法陣」を参考にしながら、色を混ぜ始めた。「うーん、全然思い通りの色にならない」「もうちょっと黒を足してみよう」などつつぶやきながら、紙に試し塗りをして、「石先輩」の色に近づけようと試行錯誤している。

O君(上写真1)は、石らしい色むらを表現するために、混色した絵の具を筆ではなく指先につけて、なじませるように色を塗っていた。



1/O君は、混色した絵の具を指先につけて、なじませるように色を塗っていた。



2/木の板をこすりつけて、表面の細かい凹凸を表現するOさん。

道具の使い方も、それぞれ工夫を凝らしている。Oさん(上写真2:作品はp10参照)は、表面の細かい凹凸を表現するために、ブラシをトントンと叩きつけたり、木の板をこすりつけてザラザラした質感を出したりと、自分なりの工夫で「石人生」を表現していた。

次時では、完成した作品の「記念撮影」を行う。



上/「色の魔法陣」を示しながら、生徒に混色についてアドバイスする先生。右/本題材の前に取り組んだ「色の魔法陣」。「魔法陣」という表現は、生徒が発案したという。



授業展開 生徒の活動(全9時間)

第1時:導入

- 石の形や色などを、さまざまな感覚を通して感じ取る。
- 自分が選んだ石の来歴や性格を想像し、その特徴をグループ内で交流する。



第2～7時:制作

- 指で触るなどして石の質感を感じ取り、道具の使い方を工夫しながら、石の形を表現する。
- 重ね塗りや混色を工夫しながら、石の色を表現する。



第8・9時:撮影・鑑賞

- 自分の作品をタブレット端末で撮影し、見方を広げる。
- 友達作品を鑑賞して、そのよさを味わう。

指導計画

準備するもの	生徒 筆記用具、アクリル絵の具 教師 石(こぶしくらいの大きさ)、軽量紙粘土、新聞紙、へら、ブラシ、ローラー、カッター、スポンジ、ようじ、綿棒、タブレット端末
学習目標	●身近な自然物の存在感を再発見することができる。 ●自然のもつ複雑さや奥深さを、形や色で表現することができる。
評価規準	●石の特徴からその性格を考える活動を通して、自然物の造形的なよさや美しさなどを感じ取ろうとしている。(美術への関心・意欲・態度) ●視覚や触覚などの感覚で捉えた石の特徴や感じ取った性格をもとに、いかに表現するか構想を練ろうとしている。(発想や構想の能力) ●凹みやとがった角などの形の特徴について、材料や用具の使い方を考え、工夫してあらわそうとしている。(創造的な技能) ●色の特徴について、混色や塗り方、用具の使い方を考え、工夫してあらわそうとしている。(創造的な技能) ●形や手触り、色などから対象の特徴や性格について交流し、自分の見方や感じ方を広げようとしている。(鑑賞の能力)



第8・9時

最高の1枚を残す

「今日は作品を撮影して、石の存在感を示す最高の1枚を残そう」。先生はそう投げかけ、グループごとにタブレット端末を配布した。

生徒たちは、作品とタブレット端末を手に、外へ。木の根元に作品を置いてみたり、切り株の上に作品を載せてみたりと、撮影のしかたはさまざま。「仲間を増やしてあげよう」と、本物の石を拾ってきて、作品の周囲に置いて撮影する生徒や、迫力を出すためにタブレット端末を地面すれすれまで近づけて、下から撮影する生徒もいた。構図やアングルなどに、生徒一人一人の工夫があらわれている。

最終の第9時では、生徒たちの作品とモデルとした「石先輩」を隣どうしに机に並べ、鑑賞会を実施。先生は生徒たちに、「石の存在感が伝わってくる」と思わせる3点を選ばせ、感想を交流させた。

最後に、授業の総まとめとして、振り返りのワークシートに記入。制作を通して、自分が選んだ「石先輩」からどんな「石人生」を感じ取ったのか、振り返った。



上／本物の石を拾ってきて、自分の作品の隣に置いて撮影する生徒。
下／構図やアングルにこだわりながら、タブレット端末で記念撮影に取り組む。

〈生徒の感想〉

- 表面は、すべすべしているところもあれば、ごつごつしているところもあった。楽しいこともあれば、傷つくようなこともあったのだと思う。
- 表現できないほど細かい傷がたくさんあった。いろいろなところにぶつかってきたんだと思った。

生徒たちは、制作を通して「石先輩」と深い対話を続けたことで、自然物のもつ重みや価値を再発見できたようだ。「この子は～」と、愛情を込めて作品を自慢する生徒たちの姿が印象的だった。

どうすれば、
「石先輩」に

近づけるだろう？



Hさん

ハート形・黄色の「先輩」
×
スポンジでなじませる



筆で重ね塗りしていると、絵の具がはげて白くなり過ぎてしまった。そこで、色を塗ってから、その上をスポンジでたたいてなじませていくと、微妙な色加減が出せた。



本物の石

作品

複雑で細かい穴がたくさんあったため、指で触って穴の深さを確かめてから、つまようじと綿棒を使い、質感を表現した。

わたしの1枚



地面に置いた作品を斜め上から撮影し、陰影のある1枚に。



S君

三角形・茶色の「先輩」
×
濃い色から順に塗る



「色の魔法陣」を見ながら、混色により茶色をつくる。最初に濃い色を塗ってから、徐々に薄い色を塗り重ねていくことで、「石先輩」の複雑な色に近づけた。



本物の石

作品

石らしい表面の質感をあらわすために、平らな部分はへらを使ってならし、ザラザラしている部分はブラシでこすった。

わたしの1枚

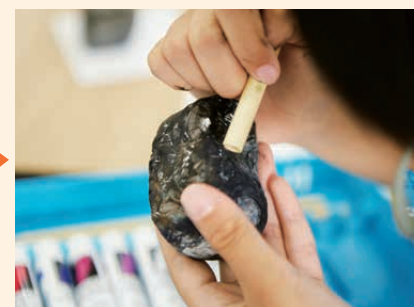


苔のむす木の根元に作品を置き、タブレット端末を地面に近づけて撮影。迫力ある構図に仕上げた。



Kさん

四角形・黒色の「先輩」
×
筆を逆さにして引っかく



よく見ると、石の表面に無数の傷がついているのがわかったKさん。筆を逆さに使って引っかくことで、細かい傷やひびを表現した。



本物の石

作品

指に絵の具を塗ってから、たたくようにして着色した。表面の無数の傷からは、「これまでの努力を感じました」。

わたしの1枚



敷き詰められた落ち葉に作品を寝かせ、真上から撮影した。

これが私の「石先輩」／



T君 石がとても複雑な形をしていたので、川や海で流されたり、転がったりして、大変だったのかもしれないと感じました。白っぽい部分は、絵の具を手やブラシでこすり取って、あらわしました。

Oさん 石の表面に、人間でいう「しわ」のような傷がたくさん刻まれていて、何事にも動じず、めげずに生きてきたのだらうと思いました。木の板やブラシを使って、表面の凹凸を表現しました。



F君 この石は、いろいろなことを経験してきていると感じました。表面に紫色を塗った上から、薄めた黄土色を塗り重ねると、本物に近い色味になりました。



授業を終えて 「再現」から「表現」へ

本題材に取り組み始めた当初から、生徒たちが色を主体的に扱えるよう、混色や水加減、濁色に価値を見いだす仕掛けとして、色に関する題材を前後に取り入れ、「学びの積み重ね」が実感できるカリキュラムを組んできました。今も、それは意識しています。

ただ、どこか技能面に偏ってしまうところがあり、「表現」よりも「再現」をさせている感覚がありました。それが、ある研究会で、本題材に取り組んだ先生が「一握りの石が実は……」という導入をしたと聞き、「この一言のおかげで、生徒は対象へ思いをさせ、再現活動から表現活動にシフトできるのだらうな」と目からうろこが落ちた思いでした。

この導入を取り入れてから、生徒は自分で選んだ石を大切にするようになりました。友達が手を滑らせて石を落とすと「おい、先輩を大事にしろよ」と言い、机が傷つかないように画用紙で作った座布団シートを配ると、大切そうにその上へ石をそっと置くのです。

この授業をきっかけに、身の回りの自然をただ眺めるだけでなく、何かの拍子にその存在に気づき、自分なりに自然を感じ取れるようになってくれたらと願います。



宜昌大
そん・ちゃん

大阪府生まれ。摂津市立第三中学校教諭。京都精華大学芸術学部造形学科卒業後、家具職人。摂津市内の公立中学校教諭を経て、2012年4月より現職。

授業を参観して

これまで数多くの授業を見てこられた飯田真人先生に、今回の授業を参観していただきました。



飯田真人
いいだ・まさ

京都府生まれ。桃山学院教育大学准教授。京都市立芸術大学大学院修了。高等学校教諭を経て、2013年より京都府総合教育センター研究主事兼指導主事。16年よりブール学院大学准教授、18年より現職。

生活の中の 美術に関わる

授業が始まる前から予感していました。教室に入ってくる生徒がとも「いい顔」をしているのです。

美術の授業は、学習指導要領は当然のこととして、地域の特性や学校の特色などを踏まえて計画します。ただ、題材の設定や指導計画はほとんど先生に委ねられているので、先生の美術に対する思いや願い、見方や考え方が授業にあらわれます。

そこで気をつけなければならないのが、先生自身の創作意欲が先行し、先生がつくりたいことをやらせる授業になってしまうことです。このような授業は、ある意味で目標が明確なので指導も行き届き、指示通りやれば、誰しもが見栄えの良い作品を仕上げられます。しかし、それだけに終わってしまいがちです。

授業で大切なことは、生徒が形や色彩、イメージなどを手掛かりに、ものとさまざまな関わりをもちながら創造を広げていくことです。

まず、宣先生は生徒たちに、対象物である石と向き合ってもらってから始めました。石に何千年何万年もの歩みがあることから「先輩」と呼びかけ、生徒は台紙を座布団として「先輩」に失礼がないよう座ってもらいました。この「先輩」という一言で、生徒たちはすっかり石の虜となり、関わりが始まったのです。

宣先生は、授業のはじめに技能としてではなく、「先輩(石)」と関わりを深めるための手立てを丁寧に伝え、「今日はこんな関わりをしていこう」と創作意欲を高めました。

授業では、生徒のさまざまな「先輩」との関わりを見ることができました。右手で「先輩」に触れながら、左手で同じように作品に触れ、目だけでなく指先を通して形を感じ取っている生徒、着彩した後にスポンジでこすってみる生徒、へらで表面を引っかく生徒——。つくり、つくりかえ、つくることを繰り返しながら、石との関わりを深めていったのです。生徒の中で「共通事項」をもとに、知識・技能、発想や構想、鑑賞の力が相互に働いているのがわかりました。

これは、本題材の前に取り組んだ「色の魔法陣(色相環)」などで混色の面白さを体感していたり、教室にさまざまな道具や素材が置かれ、生徒が自由に使うことができたことなど、題材のつながりや学習環境の工夫がなされているからこそできることなのでしょう。先生の真摯な思いが生徒に伝わり、授業マナーにも自然とあらわれていました。

こうした積み重ねが、「造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる」ことにつながると考えます。宣先生と関わった生徒たちの未来が楽しみでなりません。

表 存 自
現 在 然
す 感 物
る を の



← 宣先生の美術室の工夫は、こちらからご覧いただけます。

作家の肖像

第 16 回

このコーナーでは、
毎回一人の作家を取り上げ、
美術評論家の酒井忠康先生に、
お話をうかがいます。



Photo: 井上浩二

砂澤ビッキ

1931-1989

すなざわ・びっき

1931年北海道生まれ。彫刻家。高校卒業後、52年に上京して作家・澁澤龍彦やマンガ家・石川球太らと親交しつつ独学で彫刻を学ぶ。58年、モダンアート協会展新人賞受賞。67年に札幌に戻り、78年に中川郡音威子府村箴島に移住。小学校の廃校をアトリエとし、自然や生命を主題に独創的な活動を続けた。89年に骨髄がんのため死去。

深い沈黙を背負って

ビッキさんと初めて接したのは、1980年代半ば、代表作「四つの風」が展示されている「札幌芸術の森」の開館イベントの時です。パネラーとして、ビッキさんとお話する機会に恵まれました。「大物」らしさを感じさせるゆったりとした所作と、柔らかな物腰。一人静かに、深く、大きな沈黙を背負って立っている——そんな印象を受けました。

豪快で野性的なイメージが強いビッキさんですが、その反面、繊細で思いやりがあり、感受性豊かな人でもありました。それは、アトリエを見ればわかります。道具が大きさごとに、きちんと整理されている。こういったところに、ビッキさんの心の佇まいが表れているのでしょう。大自然に囲まれた音威子府のアトリエで、午前3時に一人鑿^{おといねっぶ}を振っていた時、ビッキさんの耳には、ひそかにアリが歩いている音さえも聞こえていたように思えるのです。

ともにつくる喜び

ヤナギの枝を組み合わせた作品「樹華」。これはビッキさんが一人で制作したのではなく、仲間と共同制作した作品です。ビッキさんは孤高の彫刻家でありながら、志を同じくする仲間とともにつくる喜びをとっても大切にしていました。それは、一種の祝祭ともいえます。厳しい自然環境に一人身を置くからこそ、仲間との共同作業という、いわば「春の喜び」のようなものの大切さがわかるのでしょう。

ビッキさんの作品は、タイトルもいい。「午前三時の玩具」「集吸呼

A」などの独特のタイトルからは、ビッキさんが想像の中で心から楽しんでいるのが伝わってきます。若いころ、作家の澁澤龍彦らと交流を深め、文学から刺激を受けたことが原点になっているのです。

彫刻とは何か

「俺の彫刻は、触れまわる彫刻だ」と、ビッキさんはよく仰^{おっしゃ}っていました。「TENTACLE」(触手・触覚)というシリーズの作品制作にも取り組んでいましたが、カニやエビが触角で周囲を認識するように、ビッキさんは触覚によって世界を捉えようとしたのです。

赤ん坊は、いろいろなものを触れることで世界を覚えていきますが、大人になるにつれ、次第に視覚に頼るようになってしまいます。ビッキさんは、触覚を追求することで、見えないものを、木彫として具現化した。つまり、触覚と視覚を循環させることができたのです。

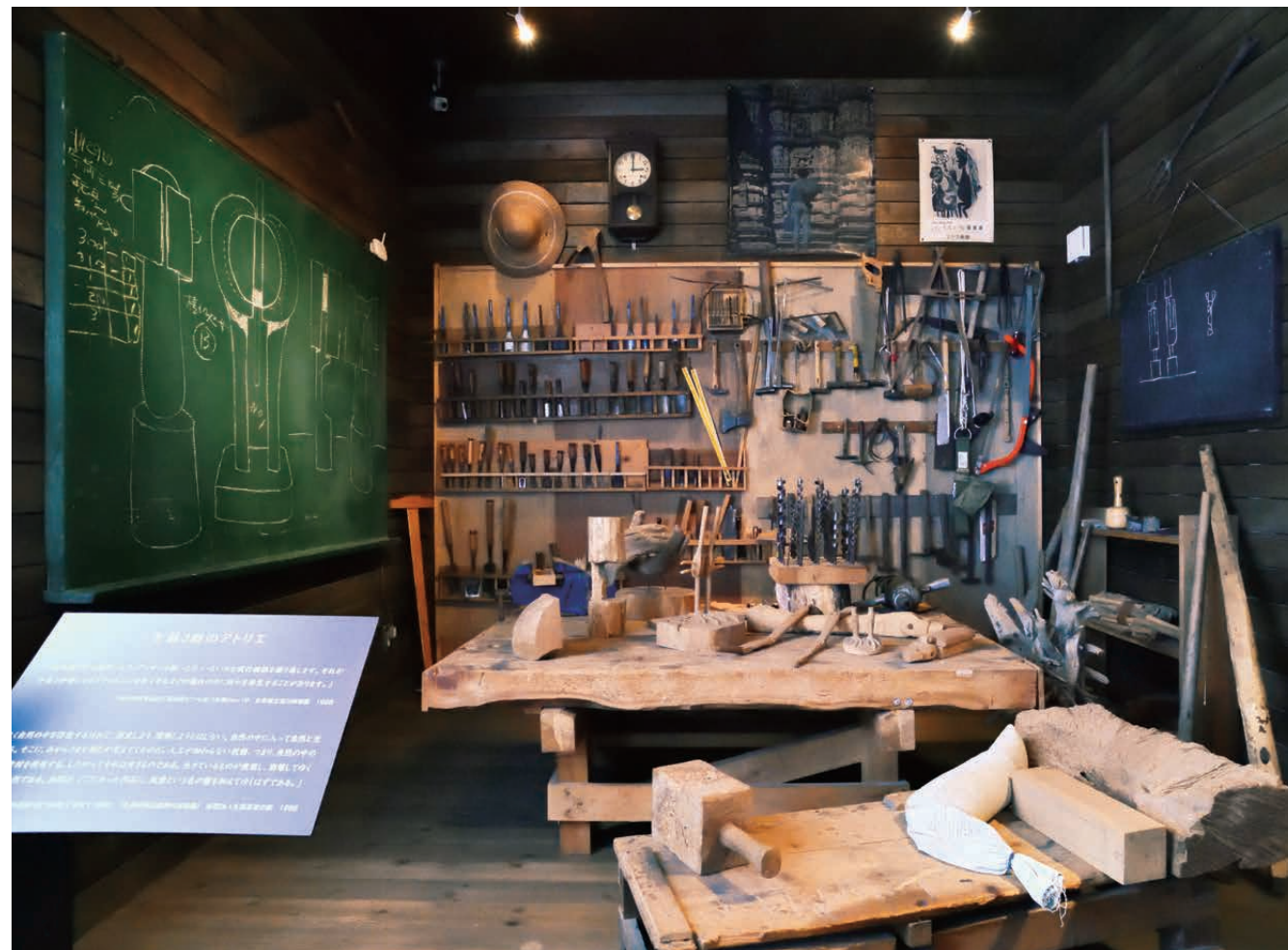
彫刻というのは、魔術的な要素と、幾何学的・構造的な要素との両方で成り立っています。前者の要素が大きすぎれば形を失うし、後者ばかりだと無機質な作品になってしまう。ビッキさんは、両者の境目を絶えず行き来しながら、「彫刻とは何か」という問いに生きた彫刻家だったのではないのでしょうか。

100メートル走のペースで、マラソンを駆け抜けた——。まさに、そんな人生だったと思います。(談)

酒井 忠康

さかい・ただやす

世田谷美術館館長、美術評論家。1941年北海道生まれ。慶應義塾大学卒業。神奈川県立近代美術館館長を経て現職。光村図書中学校『美術』代表著者。



上／洞爺湖芸術館に再現されている「砂澤ビッキアトリエ展示室」。実際に使用していた工具類や手作りの作業台を配し、音威子府村のアトリエを再現している。
(撮影・井上浩二＝2019年)



左／「樹華」

ヤナギの枝を組み合わせてつくられたオブジェ。後ろに建っているのは、音威子府村の「アトリエ3モア」(旧箴島小学校)。
(撮影・井上浩二＝1983年)



右／「四つの風」

赤エゾ松 高さ5.4m 1986年
札幌芸術の森野外美術館蔵
作者の生前の意図を汲み、自然の成り行きに任せ、「風雪という名の鑿(のみ)」によって変化を続けている。2019年9月現在、木柱4本のうち3本が倒壊し、1本だけが立っている状態。
(写真は1986年の開館から数年後に撮影)

美術部へようこそ！ & 教室を飛びだして

▼ オニノコプロジェクト

薄暗い洞窟で、睨みを利かせる無数の鬼瓦。
これは、香川県の中学校美術部員が制作し、「瀬戸内国際芸術祭2019」に出展している作品です。
県内の美術部どうしが連携し、美術を通じた社会貢献や交流に取り組む
「オニノコプロジェクト」をご紹介します。

中学生がアーティストに

「オニノコプロジェクト」は、香川県の中学生が主体となって、美術を通じた社会貢献を目指す取り組みだ。母体となるのは、香川県中学校美術教育研究会。美術部どうしの交流や、生徒が主体的にワークショップを企画・運営し、地域に貢献することなどを主たる目的としている。

プロジェクトはもともと、2013年の瀬戸内国際芸術祭(瀬戸芸)で、県内の中学生もアーティストとして参加すべく発足した。当時は県内の中学生約3000人が、県の伝統工芸品の一つである鬼瓦(讃岐装飾瓦)を制作し、別名「鬼ヶ島」と呼ばれる女木島の洞窟に展示した。この取り組みが、プロジェクト名の由来となった。

以降もプロジェクトは継続し、美術部が連携して合同研修を行ったり、ワークショップを開催したりしてきた。そして、今年の瀬戸芸では、2013年から展示されている女木島の鬼瓦をさらにグレードアップさせようと、新たに鬼瓦を追加制作することにな

った。今春に参加を呼びかけたところ、香川県内の中学校17校が手を挙げた。

「鬼瓦親分」を追加制作

6月1日に香川県立ミュージアムで開かれた合同制作会には、県内から130人以上の中学校美術部員が参加。讃岐装飾瓦の伝統工芸士・神内 俊二さんを講師に招き、1校につき1枚ずつ、鬼瓦の制作に取り組んだ。

今回制作したのは、2013年に作った鬼瓦よりも一回り大きい「鬼瓦親分」。神内さんが作業手順について説明した後、生徒は事前に準備しておいた下絵をもとに、縦45センチメートル、横35センチメートルの粘土板をへらで切り取っていった。鬼の顔が描かれた下絵は、かわいらしいイラスト調のものもあれば、睨みを利かせた迫力たっぷりのものも。ベースとなる背面が出来上がったら、その上に粘土のパーツを盛りつけて、立体的に仕上げた。

半日の作業を終えた後は、生徒から「普段使っている粘土と違い、すぐ乾いてしまうから大変だった」「ま

ゆ毛とか細かい部分の形を整えるのが難しかった」といった感想が出され、伝統工芸の難しさを肌で実感したようだった。

展示して終わりではない

合同制作会では、鬼瓦のほか、各校が卵ほどの大きさの焼き物を制作していた。これは、瀬戸芸の会期中、鬼瓦の展示会場で開催するワークショップの素材として使うもの。プロジェクトの本質は、作品制作や展示そのものではなく、美術を通じて人々との交流を深めることにある。そこで、会期中は生徒たちが展示会場に出向き、来場者や地元住民と触れ合うのだ。

生徒たちは、鑑賞者とのように関わっていくかを考える中で、「オニノコプロジェクト」が個人の活動ではなく、チームで活動するものだと気づいていく。香川県立ミュージアム学芸員の高嶋 良子さんは、「美術を媒介として人々とつながることで、生きる力につながるものを見つけられる場を提供し続けたい」と力を込めた。

※「瀬戸内国際芸術祭2019」は現在、秋会期「ひろがる秋」が開催中。11月4日(月)まで。詳細については、下記のサイトをご参照ください。

瀬戸内国際芸術祭2019
<https://setouchi-artfest.jp/>



- 1／合同制作会で「鬼瓦親分」の制作に取り組む生徒たち。
- 2／ワークショップ用に制作した直径約5センチメートルの小物。
- 3／女木島の洞窟内に展示された鬼瓦。
- 4／展示会場周辺でのワークショップの様子。
ある中学校は、合同制作会でつくった小物を輪投げの景品にして、来場者と交流していた。

放課後
第 16 回
A R T



第 16 回
「ほし づき よ」
星月夜
フィンセント・ファン・ゴッホ
キャンヴァス、油彩 73.7×92.1cm 1889年
ニューヨーク近代美術館蔵(アメリカ)

宇宙は本来「いのち」に満ちている

画家は見た通りを描くわけではないが、想像に任せるのでもない。ゴッホの「星月夜」が私たちの心を打つのは、そこに「真実」が描かれていると感じるからである。

夜空を満たす星々と月の光。渦のような光の流れは、リアリズムではないが、かと言ってゴッホの空想だと片付けられるわけでもない。

一番明るいのは金星と推定され、実際にゴッホがこの絵を描いた頃に見えたはずだとされる。光の渦は、当時天文学者によって明らかにされつつあった「星雲」の構造について、ゴッホが何らかの知識を持っていたことの表れだとする説もある。

科学的な検証も大切だが、肝心なことは、ゴッホにとって、夜空がそのように見えたということだ。そこにはゴッホ自身の体験や感性も投影されているし、人類全体の共通経験もある。「星月夜」は、私たち自身を映す鏡なのだ。

ヨーロッパでは「死」の象徴ともされる糸杉。その細長い影の向こうに広がる星空の光の横溢は、まるで、死後、命は宇宙に還っていくという信念を表現しているようにも思われる。宗教的高揚さえ感じられる。

人間の脳は、ありのままに世界をとらえるだけではない。神経細胞の活動は、さまざまな表象を生み出すが、それらはすべて「脳内現象」でもある。現実とは、脳が「絵づくり」の中で生み出した仮想に過ぎない。仮想が多くの場合現実と一致するからこそ、私たちは日常生活を営むことができる。しかし、仮想は本来、現実だけに制約されるのではない。

優れた芸術作品の恵みは、仮想の本来の自由に気づかせてくれることにある。そこには、現実とは異なる意味での、私たちの心にとっての「真実」が投影されているのだ。

弟のテオとの書簡でもわかるように、ゴッホは生涯、真摯に芸術を追求した人だった。一時期共同生活をしていたゴーギャンとのやりとりでは、ゴーギャンがより「抽象」の表現を志向するのに対し、ゴッホはあくまで自然を描きたいと主張した。

「星月夜」に描かれているのは、ゴッホにとっての自然であり、この宇宙のありさまである。宇宙は本来「いのち」に満ちている。生物と無生物の違い、生と死の境界を超えた「いのち」。それを描くからこそ、「星月夜」は傑作である。

茂木健一郎
もぎ・けんいちろう

1962年東京都生まれ。脳科学者。東京大学大学院物理学専攻課程修了、理学博士。「クオリア」(感覚の持つ質感)をキーワードとして、脳と心の間を探究している。絵画への造詣も深く、著者に「モナ・リザ」に並んだ少年—西洋絵画の巨匠たち」(小学館)など多数。